

丸かれや

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい（夏目漱石「草枕」から）。

実際漱石さんのいうとおり、世の中を何事もなく上手に生きるのは難しいことです。思う通りに行かないことの方が多いですし、口角泡を飛ばして大げんかなんていうことはしませんが、ちょっとした行き違いでさざ波が立ったりします。

それでもお陰様で、私も年と共に「丸くなった」といわれるようになりました。自分としては、そんなに角張っていたとは思ってないのですが、振り返ってみると、若い頃は上司や先輩をつかまえて良く議論しましたから、きっと「理屈っぽい奴だ」とか、「なかなかいうことを聞かない奴だ」と思われていたに違いありません。まさに、「智に働けば角が立つ」「意地を通せば窮屈だ」というわけです。

もう少し丸く立ち回れば良かったのでしょうけれど、若い時というものはしょうのないもので、自分の角をそっちのけで相手の角を削ろうとしますから、納まるものも納まらず、上司や先輩にご迷惑をお掛けしたこともあります。その頃から比べると、最近では随分と角が取れてきたように感じます。

女性向けの月刊誌「和楽」の本年2月号に、

丸かれと 思う心のかどにこそ よろずの事の 物のかかるに
という小堀遠州公の詠歌が紹介されています。

小堀遠州公といえば、徳川将軍家の指南役を勤める程の茶人ですが、この他にも華道家、造園家、建築家、書道家という多彩な顔を持つ、今でいうマルチ人間だった方です。

さて、歌の意味ですが「丸くあれと思う、そのこだわりの中に既に角がある。その角のある心は、世の全てのことに関わっている」というものです。

自分の心に角があると認識しているからこそ丸くならなければと思うので、そういうこだわりを持っていること自体、心の角から開放されていない証拠と

ということでしょうか。小堀遠州公のような高名な茶人であってさえ、結局のところ心の角を取るということはできず、むしろそういうものだとか開き直っているように感じます。

世の中を生きるのに、角張って、ごつごつと色んな人とぶつかりながら生きるより、温厚で円満な性格、心は何時も「まーるく」穏やかで、周りの人達と仲良く暮らせるなら、そんなに良いことはありません。

しかし、考えてみると、人の心というものは放っておくと、黙っていても角ができてくるものだと思います。何故なら、その角は、ハリネズミの針と同じで、自分を守る道具でもあるからです。

小さい頃は小さいなりに、大人になったらなったで、誰にでも自分に対するこだわりがあるはず。それは自我といった方がよいかも知れません。もしも、それを捨てて、周りに合わせるだけの生き方をしていると、やがては自分自身を見失うことになるでしょう。それを避けるためには、ぶつかるべき時には角がすり減ってでもぶつかることが必要なのではないでしょうか。そうしなければ、自分を守ることをできなくなります。

ビー玉のようにただ丸いだけなら、やがてテーブルから転げ落ちてしまう事だってあるでしょう。テーブルから転げ落ちてしまっただけは、何にもなりません。

坂本竜馬さんが詠んだ（一休さんが読んだという説もあるようです）

丸くとも 一角あれや人心 あまりに丸きは 転びやすきに

という歌のとおりで、人には多少なりとも角は必要で、矛盾しているようだけれど、角のある人の方がどこか魅力的のよう感じます。

「丸くあれ」と、日々心に鉋がけすることは大切なことですが、同時に、「あの人らしい」といわしめるほどの角張ったところもあって良い。誠に人間というものは、繊細で複雑な生き物です。だからこそ面白いので、ただ人が良いだけの好々爺ではつまりません。（塾頭 吉田 洋一）